

# メディア研究における空間論の系譜

——移動する視聴者をめぐって——

光岡寿郎

新世紀に入り、「ポストシネマ」的鑑賞者は、スクリーンを前に以前よりも器械的に生み出された視覚性 (*visuality*) に従属している。一方で、現在スクリーンはいたるところにある—私たちの手首に、手の中に、ダッシュボードや後部座席に、ジムのバイクやルームランナーに、飛行機やバスの座席に、そして建物や広告の表面に。私たちの位置は、もはやスクリーンに映る仮のいつかどこかとの関係において固定されることはない。スクリーンが遍在するにつれ、仮想的な窓 (*virtual window*) は機動性を備え、浸透していくのである<sup>1)</sup>。(Friedberg 2006: 87)

## 1. はじめに — 環境化するメディアとメディア研究の不自由

2005年に公開された映画、『ALWAYS 三丁目の夕日』(山崎貴監督)のなかで、その主人公である鈴木則文の自宅に初めてテレビが届いた日の様子が描かれている。タバコ屋のおばさんから小説家を夢見る貧乏書生まで、近所の住人はこぞって鈴木家の茶の間に集まり、則文がテレビのスイッチを入れるのを固唾を飲んで見守っていた。漸くスイッチが入ると、現代の薄型テレビからすればいかにも小さく、その画質も粗いブラウン管の画面に、次第にプロレスの試合が浮かび上がっていく。初めてのテレビを目にした近所の人々はその光景に目を輝かせるものの、その至福の時間は、テレビの接触不良によりあっという間に幕を閉じてしまう。

ここで描かれた光景は、昭和30年代の日本において、「テレビ」というメディアが視聴された空間を再現したものだが、本稿を始めるに当たってまず確認しておきたいのは、むしろ鈴木家のテレビお披露目にいたるシーンである。鈴木家がテレビを購入したことを知る近所の住人は、到着の日が迫るにつれ、鈴木家に招待してもらおうとそれとなくテレビを話題に取り上げる。例えば則文がタバコ屋に寄ると、タバコ屋の女主人は、あつかましくも呼ばれずとも鈴木家にテレビを見に行くと言い切るのだが、その際に視聴する番組についてはチョップのジェスチャーを見せる。その後、息子の一平が学校からの帰り道に友達を自宅へ誘うシーンが続くが、そこでもその夜に視聴する番組については具体的な名称には言及せず、三人の子供がチョップのジェスチャーを見せることで、プロレスを一緒に見るのが暗示さ

れる。もちろんこのジェスチャーは、昭和の大スター力道山の「空手チョップ」であり、テレビを見ると言えば「力道山のプロレスの生中継」であるということが、当時、東京の下町では共有されていたことが伝わってくる。

上述のシーンのなかでも描かれていたように、恐らく昭和のある時期までは、学校でも職場でも「昨日テレビ見た？」と聞けば、それが何の番組を意味しているかが了解できるような場が存在していたのだろう。また現在でも、ダニエル・ダヤーン (Daniel Dayan) とエリユ・カツ (Elihu Katz) が論じたように、オリンピックやサッカーのワールドカップ<sup>2)</sup>、そして皇室の婚礼のようなメディア・イベントに際しては、この「テレビ見た？」という問いかけが共通の話題となる場合が残っている (Dayan and Katz : 1992 = 1996)。ところが、ここで留意すべきなのは、私たちは本当に今でも「テレビ」を見ているのかという点だ。そこで、まだ記憶に新しい、2014年に開催されたブラジル W 杯を振り返ってみたい。

今回の W 杯は、日本とブラジルとの時差から、日本代表が出場するものも含め多くの試合が、通勤・通学の時間帯に開催された。そのため、家族と居間で、また友人や同僚とスポーツバーで試合を観戦することは難しく、結果的に多くの学生や社会人が、通勤や通学のバス停、駅、車内で、スマートフォンやタブレット PC を使って W 杯を視聴することになった<sup>3)</sup>。つまり、必ずしも W 杯というメディア・イベントはテレビで視聴されたわけではない。むしろ、もう少し正確に言えば、確かに W 杯の試合そのものは、現地のテレビ局に日本のテレビ局が協力するかたちでテレビ番組として制作されたのかもしれない。けれども、その映像は、テレビ受像機を通じてだけでなく、パソコンのモニター、スマートフォン、タブレット PC といった幅広いメディアを通して消費されたのである。

ところが、このような「テレビ (視聴)」の現状を目の前にして、現在のメディア研究は一瞬たじろぐ。というのも、このスマートフォンを通じた映像の視聴を「テレビ研究」の対象とみなすのか、それとも 1990 年代以降、着実にその成果を積み上げてきた「ケータイ研究」の対象とみなすのか判別することにいささか躊躇いを覚えるからだ。もちろん、厳密な意味でこの両者に線引きをすることはあまり重要ではない。とはいえ、この戸惑いには、現在のメディア研究が直面する不自由さの一端が垣間見えるように思う。なぜなら、これまでどこかでメディア研究は、その方法ではなく、そのジャンルを当てにしてきたからである。つまり、それぞれその登場とともに広範な社会的影響を及ぼした「新聞」「ラジオ」「テレビ」といったマスメディアを。そのうえで、マスメディアの制度化が進み、技術革新を背景に新たな携帯型情報端末が市場に供給されると、今度はその都度「ポケベル」「ケータイ」「インターネット」を対象に研究が積み上げられてきたという具合にだ。

もちろん、上述のようなテレビの視聴状況を、コンテンツのデジタル化が可能になったことで、それぞれテレビ、ラジオでしか視聴できなかった番組を多メディア展開する、技術決定論的な意味での「メディア・コンバージェンス (media convergence)」の実例として理

解することは一つの立場の表明にはなるだろう<sup>4)</sup>。けれども、このような理解は、一方でスマートフォンを中心とした携帯型の映像端末によるテレビ視聴の重要な側面を見落とすことにならないだろうか。なぜなら、このスマートフォンによるテレビ番組の視聴においても、テレビの前で観戦していた人々と同様に映像を視聴する、通学中の学生、通勤中の会社員という「視聴者/ヒト」が存在していたのであり、彼/彼女らはテレビ受像機ではなくとも、映像を再生するなんらかの「メディア/モノ」を介して、このメディア・イベントに参加していたからである。

そこで本稿では、このようなテレビ番組を中心とした映像が視聴されている現状を、技術やその技術を流通させるメディア産業的な視点からではなく、その視聴を支える「メディア/モノ」の視点から考えていくうえでの方法論的枠組みを検討したい。まず、現在のテレビ視聴が提起する課題を明確にするために、第二節では、既存のメディア研究において、映像の視聴を支える「モノ」が、いかなる文脈を通して対象化されてきたのかを、1980年代から現在にいたるイギリスを中心としたメディア研究の成果を参照にすることで明らかにしたい。この過程では、テレビが置かれた「空間」という視点の重要性を共有することができるだろう。そのうえで、続く第三節においては、上述のようなテレビ視聴の現状を理解するための新たな方法論的な枠組みを構築するために、メディア研究、モバイル・メディア研究、視覚文化論の最新の研究動向を整理しながら、映像を支える躯体としての「スクリーン」とその映像を視聴する「移動する身体」という鍵概念を抽出する。そして、最終節では、両概念を検討する過程で浮かび上がる、現代のメディア研究が抱える「空間論」的な課題を素描できればと考えている。

## 2. テレビ受像機とセデンタリーな身体

### 2.1. 視聴者の発見

メディア研究において、映像の視聴を支える「モノ」やモノが配置される空間の重要性が共有されていく土壌を準備したのは、イギリスの思想家、スチュアート・ホール (Stuart Hall) が提起した「エンコーディング/デコーディング (encoding/decoding)」理論だろう。現在でこそ、この「エンコーディング/デコーディング」理論は、オーディエンス研究 (audience studies) の聖典となった感があるが、このテキストは1973年にレスター大学で開催された国際学会での発表原稿を元にしており、その内容は簡潔なものだ。結論から言えば、この論文におけるホールの主張は、以下の二点に要約できる。第一に北米を中心としたマス・コミュニケーション研究に、記号論的な視点を導入すること。第二に、記号論に依拠したマス・コミュニケーションモデルを提示することで、テレビ番組に埋め込まれた支配的なメッセージに対して視聴者が取り得る立場 (position) の複数性を担保することである。

同論文の冒頭において、ホールは北米におけるマス・コミュニケーション研究が直面してきた批判を、以下のようにまとめている。

伝統的にマス・コミュニケーション研究 (mass-communication research) は、コミュニケーションの過程 (the process of communication) を、循環する回路、もしくはループといった用語で概念化してきた。このモデルは、送り手、メッセージ、受け手というその線条性 (linearity)、メッセージを交換する水準への〔過度の=引用者〕集中、そして〔コミュニケーション過程における=引用者〕異なる時点に関係性の複雑な構造として体系的に概念化できなかった点で批判されてきた。(Hall 1980: 128)

ここでホールが指摘しているのは、従来のマス・コミュニケーション研究が、シャノン＝ウィーバーに代表される情報工学的なモデルに縛られてきたことへの反省である。上述の「コミュニケーションの線条性」、その過程での「メッセージの優位性」、また「過程全体の単純化された理解」という三つの指摘は、まさにメッセージ伝達の効率性を重視した情報工学のモデルと共有された特徴だったからである。もちろん、「利用と満足 (uses and gratification)」研究のようにコミュニケーションの受け手に注目した研究も存在していたが、ホールがこの草稿を発表した1973年の段階では、北米のマス・コミュニケーション研究の主流は上述のモデルを援用した効果研究にあったことを確認しておいても良いだろう<sup>5)</sup>。

これに対して、ホールはコミュニケーションが循環するプロセスを、マルクス主義における商品の生産とその流通との比較において修正するのだが、そこで強調されたのは、この過程で流通しているのは、情報工学が想定した「電子情報」でも、マルクスが対象とした「商品」でもなく、それが「意味」や「メッセージ」だという点だ。つまり、

私たちは、コミュニケーションがやりとりされる過程において、(その循環という観点からも＝原文ママ) メッセージが特権的な位置づけを持つことを認識しなければならない。また、それがコミュニケーションの過程全体からすれば、いかに「相対的に自律的」であるに過ぎないとしても、「エンコーディング」と「デコーディング」がなされる時点が、**決定的に**重要であることも認識されねばならない。(Hall 1980: 129, 傍点は引用者、強調は原文ママ)

と述べる。従って、コミュニケーションはメッセージを流通させる「言説的 (discursive) 実践」なのであり、だからこそ後半部で指摘するように、メッセージを規定するコードが重視されるのである。というのも、メッセージを構造化するコードは、情報工学におけるそれと同じように、送信元、受信先におけるコードの同一性を明確に判断できるものではないか

らである。そのコード自体、ある特定の社会・文化的諸力を反映せざるを得ない言語であるからこそ、必ずマスメディアを通したコミュニケーションには、受け手と送り手との間に、メッセージの理解をめぐる誤差が生じる。ここに、記号論的な枠組みを導入する有効性が生まれる<sup>6)</sup>。

ここまでの手続きを確認すれば、いわゆるホールの「エンコーディング／デコーディング」理論の理解にたどりつくのはさほど難しくない。つまり、いかなるテレビ番組においても、そのメッセージの明示的な意味は固定されているかもしれないが、一方でその共時的な意味の解読には、個々のテレビ視聴者が置かれた社会的文脈に依拠した解釈が入り込む余地が存在するからだ (Hall 1980: 132-135)。このメッセージの共時的意味の解釈をめぐる、視聴者はテレビの想定したメッセージに対し、三つの異なる立場を取りうるとホールは指摘する。この点については良く知られているが、冗長にならない程度にここでも確認しておこう<sup>7)</sup>。

ホールによれば、テレビ番組が提示するメッセージに対して、視聴者は「支配的－ヘゲモニック (dominant-hegemonic)」「交渉的 (negotiated)」「対抗的 (oppositional)」の三つの立場をとり得ると言う (Hall 1980: 136-138)。順を追って説明すれば、「支配的－ヘゲモニック」な立場とは、テレビの制作者が番組に埋め込んだ支配的なメッセージを、視聴者が十全かつありのままに理解するという立場である。続いて「交渉的」な立場とは、番組のメッセージに部分的に同意する状態だと言える。つまり、その支配的メッセージの正統性は認めながらも、幾つかの部分に限定して批判的な理解を伴うという立場だ。最後の「対抗的な立場」とは、支配的なメッセージを、自身が構造化されたオリジナルのコードにおいて解体し、その代用となるコードを用いて再度合理的なメッセージを構築するという立場のことを意味している。

そして、上述のように視聴者がテレビ番組のメッセージをめぐる、意味的に異なる理解に到達しようというモデルの提案によって、以降、イギリスのメディア研究では、テレビ (映像) が視聴される空間に対する関心が徐々に醸成されていくことになる。なぜなら、次項で紹介するように、もし視聴者が個別にテレビが提示するメッセージを解釈するのであれば、その解釈を規定する要因を措定することが必要であり、いずれは、その視聴がなされる具体的な「空間」がその一要因として導かれうるからである<sup>8)</sup>。いずれにせよ、上述の議論が本稿にとって重要なのは、マス・コミュニケーション研究において、初めて自らメッセージを解読する主体として「視聴者 (audience)」に光が当てられた点にある。

## 2. 2. 視聴空間の発見

1980年代に入ると、英語圏のメディア研究は、上述のモデルを援用しながら発展していく。同じ英語圏でも、アメリカ、イギリス、オーストラリアにおいては、それぞれ異なる議論の

深化が生じるが、ここではイギリスを中心に検討を続けよう<sup>9)</sup>。

たとえその指摘は限定的なものに留まったにしても、ホールがテレビ番組のメッセージを解釈する視聴者の能動性を示唆すると、イギリスでは1980年代を通じて視聴者を対象としたオーディエンス研究 (audience studies) が流行する。特にホールが、メッセージがテレビから視聴者へと伝達されていく過程を記号論的に理解する可能性を示したことで、個々の視聴者が行う解釈を規定する社会的文脈に焦点が定まっていく。なかでもホールのモデルを慎重に実証研究へと応用し、その枠組みを整えていったのが、イギリスを代表するメディア研究者、デヴィッド・モーレー (David Morley) である。モーレーは、1980年代にテレビ視聴者を対象とした優れた実証研究を二点残している。一つは『ネーションワイド・オーディエンス：その構造とデコーディング』 (Morley 1980 reprinted in Brunson and Morley 1999)、もう一つが『ファミリー・テレビジョン：文化的権力と家庭的余暇』 (Morley 1986) である<sup>10)</sup>。

前者は、1969年から14年に渡ってBBCで放映されたニュース番組、「ネーションワイド」のオーディエンス研究である。モーレーは、1976年、1977年の放送を素材に、合計29グループを対象にフォーカスグループインタビューを実施した。前半の18グループは、1976年の通常回の「ネーションワイド」を、後半の11グループは1977年に放映された「国家予算とその影響」をテーマとした特集回を視聴している。その詳細を紹介することは本項の目的ではないが、この調査から明らかになった重要な成果は、同じ番組を視聴しても、その視聴者が所属する社会的位置 (social position) によって、番組に対する態度に差異が生じた点である。ホールの議論では、「交渉的」「対抗的」な読みが生じる具体例としては、当時の「労使関係法 (Industrial Relations Bill)」が制限する労働者のストライキについてのきわめて短い言及がなされているに過ぎず、実際にはいかなる状況で視聴者間の読みが分かれるのかについては触れられていなかった。ところが、モーレーのインタビュー調査からは、この「ネーションワイド」というニュース番組の理解には、まず視聴者が保守党と労働党のどちらを支持しているのかという政治的な姿勢が一定の影響を与えていることが示唆される。加えて、この政治的態度自体、その背景となる個々の視聴者が属する社会的位置に依拠するという暫定的な結論を得たのである。

一方で後者は、はっきりと前者の反省のうえに設計され、よりありのままのテレビ視聴の姿を描くことを目指す実証研究であった。その変化は、モーレーの問題意識、方法論の両者に反映されている。問題意識については、モーレーは『ネーションワイド』においては、「ある特定の番組を題材に、視聴者が異なる『読み』を示すパターンの分析」という事後的な分析に主眼を置いていたのに対し、『ファミリー・テレビジョン』ではむしろ、「番組の『読み』が (通常 = 原文ママ) 生まれる枠組みとして、家庭で視聴する文脈それ自体を分析する」 (Morley 1986: 14) と、その形成過程に注目している。つまり、テレビ視聴の結果生ずる解

読のパターンを社会的位置と関連づけるスタティックな分析ではなく、家庭という環境を通じて一定のパターンが析出されるダイナミズム自体を分析の中心に据えたのである。

また、家庭への注目は、『ネーションワイド』における調査手法上の限界から導き出されたものでもあった。彼は、同書のなかで以下のように振り返っている。

〔『ネーションワイド』が直面した=引用者〕第一の困難は、『ネーションワイド』の視聴者研究が、彼／彼女らの家の外で、数人で構成されたグループを対象としたインタビューによって実施されたことに起因している。つまり、彼／彼女らにとって「ありのままに (natural)」家庭で視聴するという文脈では調査がなされなかったのである。(Morley 1986: 40)

つまり、『ネーションワイド』の調査時には、このようなニュース番組の大半は家庭で視聴されるにもかかわらず、その視聴をめぐる会話が公的な場 (public place) であるグループインタビューとしてなされたことで、むしろ同じグループの成員や、研究者であるモーレーらを意識し、ありのままに自身の経験について話すことが困難になったと考えたのである。

ゆえに『ファミリー・テレビジョン』においては、18グループに対してインタビューが実施されたが、これらの家族はいずれも自宅の寛いだ雰囲気の中で、普段利用している居間に置かれたテレビや周囲の調度などにも言及しながら話をしている。結果として、この研究からは、テレビが視聴される家庭という空間を通して、社会的な性役割が再生産される様子が明らかになる (Morley 1986: chapter 6)。例えば、男性にとっては仕事後の余暇としてテレビが視聴されているのに対して、逆に女性にとっては家庭こそが労働の場であり、むしろ家事労働の友としてテレビが存在していたのである。

これら1980年代に実施された実証研究の主眼は、モーレー自身も後に認めているように (Morley 1992: 15)、私たちがテレビを視聴する際の理解を規定する社会的属性を析出することに向けられていたと考えても良いだろう。つまり、前者は原著の段階では「社会的位置 (social position)」という用語を用いていたが、それは「階級」であり、後者においては家庭に持ち込まれた性役割、つまり「ジェンダー」だったのである。このようなデコーディングの規定要因を一つずつ詳らかにすることで、ホルの理論は鍛えられていく。

しかし、この一連のモーレーの議論を、記号論的な枠組みに依拠したオーディエンス研究の精緻化という水準でのみ理解するのだとすれば、それは恐らく不十分である。むしろ、この二つの研究を通じて彼が抱いた強い欲求とは、可能な限りテレビの視聴経験を微細に描きたいという思いのほざだからだ。モーレーは、メディア研究におけるエスノグラフィーの重要性を指摘した1992年の著書のなかで、以下のように述べている。

それ〔メディア研究におけるエスノグラフィ的な手法＝引用者〕は、詳細かつ可能な限り、実際の空間と時間においてコミュニケーションの過程を研究する（study）こと、概ねエスノグラフィックな態度を採用すること、そして、社会的に位置づけられた意味の生産と消費に従事する個人や集団の日常的な活動や実践のなかで、行為と束縛のダイナミクスを綿密に調査する（examine）ことなのである。（Morley 1992:183, 傍点は引用者）

つまり、記号論的な分析を精緻化させた結果、一面ではテレビ番組をテキストとして理解することからは逸脱して、むしろテレビの視聴経験を理解するうえでは、その行為が実際に行われる具体的な、もしくは微細な「空間」と「場所」がそのままに描かれる必要があるという認識に到達した点こそが、1980年代のモーレーの、もしくは当時のイギリスのメディア研究の流れを特徴づけたのである。

### 2.3. 「私的空間／公的空間」の差異の発見

結果として1990年代に入ると、イギリスでは家庭でのテレビ視聴を対象とした研究が増加していく。例えば、1980年代にモーレーと共に実証研究を指揮していた、イギリスのメディア研究者ロジャー・シルバーストーン（Roger Silverstone）による『テレビと日常生活』（Silverstone 1994）などは、その最たるものだ。ここでは、実証研究での成果を参照しながら、再度日常生活におけるテレビ視聴との関係性において「能動的な視聴者（active audience）」とは何者なのかが検討されている。他にも、現在ブラジルの文化人類学者として活躍するオンディーナ・レアル（Ondina Fachel Leal）の「大衆的趣味と学術的なレパートリー：ブラジルにおけるテレビの場と空間」（Leal 1990）も挙げられる。社会的に異なる階層に属するブラジルの人々がどのようにテレビのメッセージを受容するのかという問題意識までは、オーソドックスに1990年代的なイギリスのオーディエンス研究を引き継いでいるが、「モノとしてのテレビ受像機（the television set as an object）」（Leal 1990:19）にまで、その検討の対象を広げたのは、空間への関心が共有されている証左となるだろう。写真を効果的に提示しながら、ある家庭が所属する階層に応じてテレビ受像機というモノそれ自体に付与される象徴的な意味も異なるため、テレビ受像機の家庭内での配置や、その周囲の装飾が変化する様子が説得的に議論されている<sup>11)</sup>。

このように1980年代の実証的な視聴者研究を基礎に、1990年代にはテレビが視聴される空間としての「家庭」に注目した研究が蓄積されていく。しかし、ここで再度考えるべきなのは、私たちは家庭以外の場所でテレビを見ていなかったのかという問いだ。そもそも、具体的な「空間」と「時間」を限定したかたちでのエスノグラフィックな調査手法が要請されることになったのは、テレビが視聴される空間を分厚く描くためだったはずである。ところ

が、結果的にはその「空間」として、私的な視聴空間である「家庭」が肥大化してしまったのである。確かにモーレーが、

そのような研究は〔エスノグラフィーを採用したオーディエンス研究＝引用者〕、いずれも世帯や家庭で始まる。なぜなら、テレビへの関与（involvement）が最初に生まれるのはここ家庭であり、この家庭において、最初の意味の分節が成されるからである。（Morley 1992: 183）

と述べるように、依然としてテレビを視聴する空間として家庭の占める比重は高い。けれども、序でもすでに指摘したように、現代社会においてテレビ視聴が可能な空間は、日常的に私たちが訪れる空間全域に遍在していると言っても良い。確かにこのようなテレビ視聴の空間的遍在は、日本では2006年にワンセグ放送が開始され、携帯電話でテレビ受信が可能になって以降だろうが、それでも1990年代においても、私たちは屋外の公的な空間でテレビを視聴していたはずである。にもかかわらず、2000年代に入ってもテレビの視聴空間として家庭に特権的な位置を与え続けてきたメディア研究に異なる視角を与えたのが、アメリカのメディア研究者アンナ・マッカーシー（Anna McCarthy）である。彼女の議論に関しては別稿でも一度触れているが（光岡 2010）、本稿の主旨に沿うかたちで再度紹介する。

1990年代末からマッカーシーが関心を抱いていたのは、前項のリアルと同様に、コンソール型を含めたテレビ受像機が抱えこむ重層的な意味である。彼女は、アメリカで現地のエスニック・マイノリティのために、母国の料理を提供する世界各国のレストランに置かれたテレビ受像機を分析した論文のなかで、以下のように指摘している。

私が着目しているのは家庭内に置かれたテレビ受像機ではなく、むしろ家の外にあるコンソール型テレビの扱いである。特に関心が強いのは、アメリカの労働と余暇の都市空間に、加えて食料品店、軽食堂、ビデオ店といったサービス施設（service establishment）にテレビが置かれた環境（TV settings）である。（McCarthy 2000: 308）

つまり、あくまで個々の視聴が生起する過程を解明しようと試みていたにもかかわらず、いつの間にかテレビの視聴空間として普遍化されてしまった「家庭」に対して、まさにそれぞれ個別の重層的な文脈に規定されざるを得ない場末の食堂におけるテレビ受像機を取り巻く物的環境を、積極的に議論の対象に据えたのである。

彼女が、幾つかのアメリカの大都市でエスニック・マイノリティを顧客とする食堂に設置されたテレビを分析したのは、そのテレビ受像機を中心に構築された空間が、情報技術に支

えられたグローバルな情報のフローと、ディアスポラとして生きる移民のローカルな身体をつなぐ結節点だと考えていたからだ。例えば、とあるロシア料理のデリカテッセンがその顧客にロシアを想起させるのは、店内に設置されたテレビから衛星放送を通してロシアの番組が放映され、そのテレビの周囲にはロシア料理のポスターが貼られているからである。一方で、テレビが置かれている冷蔵庫には、何気なくグローバルなアパレル企業である「FILA」のマグネットも同様に貼られており、否応なくこの店舗もグローバル資本主義の中心たるアメリカに位置していることも同時に思い起こさせられる (McCarthy 2000: 320-323)。このような関心から、マッカーシーは後にその主著『アンビアント・テレビジョン：視覚文化と公的空間』(McCarthy 2001)において、上述のレストランに加えて、地元の飲み屋、病院の待合室、空港の搭乗口といった家庭外の公的な空間に設置された「テレビ」の視聴空間を、一つ一つ丁寧に記述していく。

この過程を通して最終的に彼女が導いた結論とは、テレビとは「場所に固有の (site-specific)」メディアであるという事実だ。この「site-specific」という用語は、元々は現代美術の専門用語を援用したもののだが、マッカーシーは以下のように説明している。

[テレビという＝引用者] メディアの最も包括的な特徴とは、その**場所固有性 (site-specificity)** である。つまり、ある特定の場所において、他のメディアやその場限りの社会的論理と混じり合うテレビならではの能力のことである。(McCarthy 2000: 313, 強調は原文ママ)

つまり、ここにいたって初めて、従来のメディア研究においては暗黙の了解となっていた「家庭」の特権性を解除したうえで、テレビが視聴される「空間」という問いを射程に収めることが可能になったのである。そのうえで彼女は、「場所固有性」については別稿で以下のように続けている。

数多くの制度的、個人的なテレビの使用が持つ場所固有性という性質は、スクリーンと環境の間での関係性を定義する観客性の有り様 (the mode of spectatorship) を選び出すことが不可能だということの意味する。むしろ、テレビ的な空間を構成する視線と制度、主体と身体、スクリーンと物理的な構造が織りなす拡散したネットワークは、それぞれの場所で、きわめて特定の影響を維持するのである。(McCarthy 2001: 3)

この指摘からは、「空間」という視点を媒介に、1980年代以降の視聴者モデルから演繹的に個別の事例を記述するのではなく、むしろテレビが設置された個別の空間の分析を帰納的に積み上げることで、その視聴を規定する社会的な諸力の関係性を可視化するという方向性の

転換が見られる。僕自身、マッカーシーが提示した方法論的枠組みは、1980年代から追ってきたイギリスを中心としたメディア研究における空間論の一つの到達点として評価しているし、スクリーンを備えた電子機器であれば、おしなべてテレビ視聴が可能な現代のメディア環境を分析するに相応しい枠組みだと思う。

けれども、テレビ視聴の現状を議論していくうえでは、マッカーシーの議論においても未だ不自由さが残る。それは、これまで検討してきたホールからマッカーシーにいたるまで、結局「テレビ受像機」の前に座る視聴者の「セデンタリー (sedentary) な身体」というカップリングが温存されてきた点である。言い換えれば、いかにモーレーが記号論を越えて実際の視聴が行われる空間を対象化しようとも、いかにマッカーシーが視聴空間における家庭の優越性を解除し、公的な空間を分析の射程に収めようとも、家庭でも、移民の集うレストランにおいても、視聴者は結局テレビ受像機の前に固定されたままだったのである。

しかし、現在多くの人々が、通勤、通学の車内で自身の携帯型端末を利用して映像を立ったまま視聴し、その端末を手に表面を無数の電子スクリーンで覆われた都市空間を横切りながら日々を送っている。だとすれば、現在私たちが手にしている「テレビ受像機」と「セデンタリーな身体」では、この現状を記述することは難しいだろう。そこで次節では、現状を理解するための思考実験には不可欠な、この両者に変わる概念的な道具を探してみることにしよう。

### 3. 遍在するスクリーンと移動する身体

#### 3.1. スクリーンという分析単位

ここまでは、メディア研究におけるテレビ視聴の文脈に沿って議論を続けてきたが、上述の「テレビ受像機」と「セデンタリーな身体」というカップリングが、他の映像ジャンルに適用されうる可能性については、さほど想像に難くないだろう。映画を例にとっても、映像の保存技術の発展とともに、その鑑賞形式は映画館でフィルムを見るという経験から、自宅でビデオやDVDで映画を見るという経験へ移行したわけだが、やはりそこでも前提とされたのが「座って見る身体」だからだ。1980年代以降の視覚文化論を牽引したアン・フリードバーグ (Anne Friedberg) も指摘するように、「私たちは映画の観客として、テレビの視聴者として、コンピュータの利用者として、画像と音声にあふれたスクリーンの前でじっとしている (immobile)」（Friedberg 2006: 150）のである。

その意味では、恐らくテレビ視聴を対象としてきたメディア研究も、映画鑑賞を対象としてきた映像研究も、デバイス上のテキスト、画像利用のやりとりを対象としてきた情報通信端末の研究も同様の問題に直面している<sup>12)</sup>。つまり、これまでの研究対象が技術的、物質的にはスマートフォンやタブレット PC へと統合されたことで、この画像情報を映す「モノ」と、それを眼差す「ヒト」の関係性をいかに概念化しうるのかという問いと向き合わざるを

得なくなった。そこで、まずは「テレビ受像機」に変わる「何か」を指し示す言葉を手に入れるために、上述の関連諸領域を含めた現状の取組を検討することから始めよう。

まず、いかにも視覚文化論らしいかたちで概念化を行ったのが、上述のフリードバーグだ。一言で言えば、彼女が採用したのは「窓 (window)」である。とりわけ、電子機器上に現れた窓(まさにPC上を走るOSそのものが「Windows」なわけだが)を含め、「仮想的な窓(virtual window)」という用語を採用したのである。この書籍の出版が2006年のため、彼女が現状を予期できたとはまでは言わないが、画像情報のデジタル化以降の映像を支える躯体という観点からは一定の有効性を保持している。この概念を通して強調されるのは、デジタル技術に依拠した画面に慣れると、画面の奥行きが意識されなくなる点だ。私たちは普段、窓枠から見える風景、額縁のなかの絵画、テレビ画面の映像に、遠近法的な奥行きを自然と見出すわけだが、現在のPCのモニター、スマートフォンの画面では、その画面上に複数展開された窓の関係性は空間的な奥行きを必ずしも意味していない。むしろ、同一平面に拡がった複数の窓(それはテキストエディタでも、ブラウザでも、映像作品でもあり得る)がそれぞれ持つ空間構成の論理に視覚を適応させなくてはならないため、画面をモザイク的に認識することになる。このような視覚的認知を促す傾向を共有するデバイス全体を、フリードバーグは「窓 (windows)」という概念で対象化しようと考えたのである。従って彼女は、

複数のスクリーンとなった「窓」の観客 (beholder) として、私たちは現在、単一で継時的な性質よりも、複数で瞬間的な性質に依存した「仮想的な窓」を通して、空間的にも時間的にも断片化されたフレームのなかで世界を見ている。(Friedberg 2006: 243)

と結論づける。

これに対して、情報端末を対象としたモバイル・メディア研究において一定の概念枠組みを提出したのが、近年北米で著しい業績を挙げるアドリアーナ・デ・スーザ・エ・シルバ (Adriana de Souza e Silva) である。彼女はジョーダン・フリス (Jordan Frith) との共著において、日常生活に欠かせないスマートフォンを中心とした多目的型の携帯型情報端末を、「インターフェイス (interface)」という概念で把握することに努める。

大まかに言えばインターフェイスとは、二つの異なった部分、もしくはシステムの間にある何か (something) であり、両者がお互いとコミュニケーションをとったり、相互作用を及ぼしたりすることを促す何かを意味している。インターフェイスは、二つのグループ間のつながりを生む何かである一方で、システムの一部を構成し、その相互作用に影響を与えるのである。(de Souza e Silva and Frith: 2012:1-2, 強調は原文ママ)

上記の定義はやや漠然とした印象を与えるかもしれないが、スーザ・エ・シルバが「インターフェイス」という概念において強調するのは、「関係性」である。上述のようにフリードバーグは、情報技術の発達に依拠した「仮想的な窓」の遍在を通して、見る身体の知覚の変容に焦点化したと言える。一方で彼女は、日常生活のなかで都市空間を移動するたびに、携帯型情報端末から画面上で情報の取得、更新を続ける、主として若年層の行動を対象に、彼／彼女らが液晶画面を通じて、さらにはその画面を指で操作することで、日常的な人間関係と、電子ネットワーク上の空間と自身が占有する空間の関係性をコントロールする様子を描いたのである (de Souza e Silva and Frith 2012: 177-179)。また、スーザ・エ・シルバの場合には、位置情報サービス (location-based services) の利用を軸に携帯型の情報通信端末の分析を進めたため、画面の触覚的操作とその視覚的受容が一体化してしまっている点も興味深い<sup>13)</sup>。位置情報サービスを採用したアプリケーションは日本ではさほど浸透しなかったため、北米の文脈に即した十分な理解かはやや不安があるが、最終的にスーザ・エ・シルバは、知人と共有した位置情報型サービスの SNS の記録それ自体 (この情報は端末上の地図を基礎に置く画像情報として認識される) が、個人のアイデンティティに新たな側面を加え、さらにその構築に資すると結論づけたのである。その意味では、「視聴すること／見ること」と「関与すること／触ること」の一体性、およびその「見ること」が強く移動に関連づけられていることに注意しておく必要がある。

しかし、上述の両概念は、互いに現在のテレビ視聴を支える「モノ」の一側面のみを強調し過ぎているようにも見える。というのも、確かにフリードバーグは、「窓が壁になるように壁が窓になり、壁がスクリーンになるようにスクリーンも窓になる」(Freidberg 2006: 123) と述べるように、奥行きを失った画像情報が「仮想的な窓」を通じて空間的に遍在する現状については鋭い嗅覚を示した。一方で、スーザ・エ・シルバの場合には、その端末を見るという行為が、常に自身が移動し、その情報を更新するという働きかけと不可分にあることを指摘するに留まったからである。しかし、ともに本稿が対象としてきたスマートフォンやタブレット PC といった現在の映像視聴端末が、視覚メディアであると同時に、情報通信端末であるというつかみ所のなさを充分にはとらえきれていない。

この状況を踏まえて最後に紹介するのが、「スクリーン」である。実はこの概念には、英語圏では 1990 年代後半から、その有効性に次第に注目が集まっていた。なかでも特徴的なのがイギリスの映画研究である。なぜなら、本項の冒頭でも指摘した通り、1990 年代ですら、多くの人々が映画館だけではなく自宅の居間のテレビで、また自室の PC のモニターを通じて映画を楽しむ状況において、その内容に偏向した従来の「映画 (film)」という枠組みでは、その視聴実践が把握できなくなるという不安が共有されていったからである。結果、イギリスの大学では一部の映画学科が、その看板を「映画研究 (film studies)」から「スクリーン研究 (screen studies)」へと掛け替えたほか、同分野に定評のあるロンドン大学のカレッジ

群は、2001年には、共有のポータルサイトとして「Screen Studies Group」を立ち上げている<sup>14)</sup>。いずれにせよ「スクリーン」という概念は、フリードバークと同様に、映像の内容から映像を支える物質性への関心の移行を強く印象づける。

このように映像研究の文脈で先行して共有されていった「スクリーン」概念に、現時点で最も包括的な定義を与えているのが、オランダのメディア研究者ナナ・ヴァホーフ（Nanna Verhoeff）である。ヴァホーフによれば、

スクリーン（screens）は一度に、モノ（objects）、技術（technology）、映像装置、そして映像機械となる。その一枚のスクリーン（the screen）は、ハイテク機器（technological device）、インターフェイス、三次元的な配置、および潜在的には時間と運動の四次元的な関係性のなかに位置づけられた平らな二次元の表面、メディエーションと映像の隠喩、表象の枠組みであり、技術革新と変化の場である。（Verhoeff 2012: 15）

一読しただけでは、この定義は拡散した印象を与えるため、その有効性にいささかの不安を覚える。ただし、以下の「窓」との比較において、「スクリーン」の特徴を記述した引用からは、現代社会において映像を視聴する「モノ」を「スクリーン」として概念化する意義の一端が浮かび上がってくる。

窓は、窓を見ている人と彼／彼女らが見ているものを隔ててしまう一方で、スクリーンは、スクリーン上の画像（スクリーンを越えてはいかないが＝原文ママ）へと見ている人々を引き込む。両者の事例において、窓を通してみること（window-ed seeing）は孤立化した〔映像への＝引用者〕関与を制度化し、スクリーンを見ることは新たな出会いの経験を促すのである。（Verhoeff 2012: 85）

ここから分かるのは、視覚文化論的な文脈を通じて析出された「窓」が、テレビ受像機と同様にそれを眺める観衆に受動的な態度を強いるのに対し、むしろ、「スクリーン」はその平面を視覚的に眺めるだけではなく、触覚的な操作も含め、自身の行為が新たな発見に開かれているという性質が重視されている点である。恐らくここに、「窓」とモバイル・メディア論における「インターフェイス」をつなぐ「スクリーン」の優位性がある。つまり、スクリーンという用語それ自体が、映像研究における映像の物質性という含意を元々強く引き受けてきた一方で、窓には欠けていた、その映像を支える「モノ」への身体的な関与という「インターフェイス」の持つ特性も上書きされうる媒体だからである。

ここまでの比較から、まず「仮想的な窓」と「スクリーン」には互換性があることが分かる。ただし、「窓」にはそれを見る者の主体的な関与が欠けていた。もちろん、この仮想の

窓は、PCの操作を通して作動する点で見ると見る者の関与を必要としているが、マウスやキーボードを通じた操作は、あくまでその窓を自身の外部の対象として設定してしまう。ところが、タッチパネル技術導入以降のPCも含めて、スクリーンの操作は身体と直に接続されている。従って、「インターフェイス」という枠組みにおいて焦点化される、この平板な電子的板を自身が触知することと、映像を認識するという行為が不可分に生じるという性質もまた包含しうるのである。

その意味では、「スクリーン」という概念化の水準において、上述の三者の方法論は交差しうる。もちろん、ここでの整理は暫定的なものに過ぎず、今後その精緻化が必要とされるだろう。しかし一方で、私たちが接している携帯の映像端末とは、そもそも現在進行形で変化を続ける得体の知れない「モノ」である。実際には上述に加え、記録メディアでも、撮影機器でもあるスマートフォンやタブレットPCを、現時点でこれ以上どのような枠組みにおいて把握しうるだろうか。だとすれば、ここで紹介した現在の映像の視聴状況を理解する方法論の相互的な関係性を可視化する枠組みとして、「スクリーン」という方法のもとで現状を分析することを選択したい。だとすれば、次に検討すべきなのは、この「スクリーン」を視聴する観衆の変容を把握する枠組みの検討である。

### 3.2. 移動する視聴者

恐らく映像の視聴を支える「モノ」に比較すると、視聴者の身体の変容をとらえる枠組みを抽出するのは難しい。なぜなら、いかに家庭の外で日々携帯型の情報端末で映像を視聴する機会が増加しているにしても、一方ではそのジャンルを問わず、セデンタリーな視聴形式が依然として根強く残っているからである。ただし、それでも現代のテレビ視聴経験において生じている変化の一つ指摘するとすれば、それは視聴経験の断片化である。フリードバーグが「仮想の窓」を通じた視聴経験について指摘するように、「私たちは現在、視覚情報を—それが静止画であれ動画であれ、大きかろうが小さかろうが、また芸術的であろうが商業的なものであろうが—空間的にも時間的にも断片的なフレームで受容している」(Friedberg 2006: 7, 傍点は引用者) ののである。

その理由は二つある。まず、時間的な側面からすれば、このような視聴において私たちは常に中断を予期しているからである。スマートフォンを通じたテレビ視聴は、家庭外の公的な空間でなされることが多いため、常に外的な要因によって中断される可能性がある。例えば、自身が占有する空間であれば、駅のプラットフォームで視聴中に乗車すべき電車が到達したり、逆に車内で視聴している途中で下車駅に到着したりすれば、私たちはその視聴を一度中断せざるを得ない。一方で、スクリーンはネットワーク機能を持つ映像視聴端末であるため、ネットワークに接続されている限り、メールアドレスやSNSにメッセージが到着するたびにアイコンが起動し、スクリーン上では映像の視聴と、情報の取得画面が矢継ぎ早

に交替することになる。ゆえに、このスクリーンを通じた映像の視聴においては、番組、もしくは作品のプロットは細分化され、視聴内容の記憶が断片化してしまう。

一方で空間的な側面からすれば、それは素朴に私たちが移動していることに起因する。すでに何度か言及してきたように、21世紀を迎えるまで映像を投影する「モノ」の大半は、据え置き型であった。確かに、小型のDVDプレイヤーやラップトップPCを携帯していた者もいるだろうが、それは街中や、電車の待ち時間に視聴するものではなく、家庭外の場所ですでにまとまった時間をとって視聴することを前提としていたはずだ。ところが、スクリーンを通じた視聴は、空間的には相互に関係しない複数の場での視聴を余儀なくされる。通勤の電車を待つプラットフォーム、その車両内、調剤を待つ薬局の待合室といったように。W杯を例にあげれば、セデンタリーな視聴であれば前後半90分が試合の記憶として残るが、東の間の滞在に留まる以上、また移動中に視聴している場合には電波状況の影響を受ける以上、彼／彼女にとっての試合とは、個別の場所で見ていた映像の記憶のパッチワークとして残るに過ぎない。その意味では、視聴空間の記憶もまた断片化せざるを得ない。

しかしより重要なのは、このような視聴においては、視聴内容と視聴空間の記憶がそれぞれ断片化するだけではなく、そのカップリングも断片化してしまう点である。例えば、名画座の閉館に際してその劇場をそこで鑑賞した作品とともに思い出したり、ドラマの再放送を見ながら家族と一緒にテレビを見ていた居間を想起したりと、従来の視聴経験はその内容と空間の組み合わせとして構成されてきたわけだが、そのような視聴の記憶自体が成立しなくなる可能性を有しているからだ。分析的には、セデンタリーな身体とテレビ受像機の関係においては、それが家庭の居間であれ、それが病院の待合室であれ、テレビ受像機とそれを見る私たちを空間的な分析単位として切り出すことが想定されていたはずだ。ところが、この移動する身体にとってある映像作品とは、駅のプラットフォーム、通勤の車内、病院の待合室、そして最後の30分を視聴した自宅の居間のつぎはぎであり、1990年代のメディア研究が前提としていた空間概念では、視聴経験という単位を切り出すことが困難になってしまう。

この点に関しては、「インターフェイス」について議論するなかで、スーザ・エ・シルバがヒントを残してくれている。彼女は、アルゼンチンの文化人類学者ネストル・カンクリーニ（Néstor García Canclini）に言及しながら、携帯型情報端末を介した移動がもたらす、都市空間における「場所」の断片化について、以下のように指摘している。

カンクリーニに同意して、ある都市のたった一枚の地図を描くことは、以前はどうあれ今では不可能である。むしろ都市空間は、複数の地図を生産しながら、数多くの異なる方法で表象され、語られることになるだろう。そして、その地図一枚一枚が、都市環境の異なる要素や見え方を包んでいる。このようなインターフェイスによって、私たちは都市のランドスケープにおいて断片化された位置を結合し、さらには、都市のなかで地

図を作成し、移動する新たな様式を生み出すのである。(de Souza e Silva and Frith 2012: 175, 傍点は引用者)

この引用における前半の指摘は、映像との関係性においては視聴空間の断片化を意味している。つまり、スクリーンを媒介に位置情報サービスを利用しながら、スポット単位で場所の経験を積み重ねることで、その恣意的な総体として描かれた都市が、一枚一枚の地図となるからである。しかし、むしろここで注目すべきなのは、後半では同じスクリーン（彼女にとってはインターフェイス）が、このような断片化された位置を結合するという矛盾した役割を課されている点である。

恐らくスクリーンというメディアを通じたこの矛盾が、移動する身体を特徴づける大きな要因となる。つまり、移動しながら映像を視聴する人々にとって、その映像全体の記憶が映像の内容の一貫性にも、その映像を見ていた空間にも依存できない以上、もしそれでも「ドラマ」や「スポーツの試合」といった視聴の全体像を描くことが可能だとすれば、それはその全ての視聴が今自身の手にある「スクリーン」に結びつけられているという事実のみに依拠するしかないからである。言い換えれば、スクリーンという映像端末は、移動する身体の視聴経験の断片化を促進すると同時に、一方ではかろうじて映像経験としての全体像をつなぎとめる結節点ともなっている。また、オーディエンス研究の文脈に差し戻すとすれば、視聴経験における空間や文脈そのものが「スクリーンというモノ」に凝縮されるような状態を、検討の対象とせねばならないのではないだろうか。

最後に、1990年代まで前提とされていたセデンタリーな視聴者と比較してみよう。テレビ受像機の前にじっと座る視聴者は、テレビの内容を解釈する視聴者でもあった。番組全体を通して視聴し、その内容に賛否の態度を示す視聴者として概念化されてきたのである。ところが、ここまで議論してきた視聴者は、移動する (on the move) 身体だと言えるだろう<sup>15)</sup>。番組に対してははっきりとした態度を示せるほど視聴に集中することもなく、断片化された「時間」と「空間」における視聴経験をパッチワークのように構成する身体である。このような視聴者は、そもそも真剣にテレビを視聴していないし、じっくりと映画を鑑賞しているわけではないのだから、研究の対象にそぐわないという批判はありうるだろう。しかし、それでも当座、「スクリーン」と「移動する身体」という枠組みにおいて、近年増加する移動しながら映像を消費する人々を議論してみたい。なぜなら、先の引用でスーザ・エ・シルバが指摘したように、彼/彼女たちこそが、都市のなかで移動を続ける身体が生み出す、新しい映像の受容形式を示唆しているのかもしれないのだから。

#### 4. おわりに—テレビなきテレビ研究を見据えて

さて、本稿ではここまで、現代社会における映像の視聴経験を分析するための方法論的な枠組みを検討してきた。まず、序においては、「テレビ」が視聴される風景の変容に言及しながら、公的な空間で移動中に視聴されるテレビの現状を共有した。そのうえで第二節では、スマートフォン等のスクリーンによる映像の視聴を特徴づける「空間」という論点<sup>6</sup>が、1980年代以降のイギリスを中心としたメディア研究においていかに問題化されたのかを描くと同時に、その限界を指摘した。つまり、テレビはすでにさまざまな公的空間で移動を続けながら視聴されているにもかかわらず、現在私たちが手にするメディア研究の方法論的な枠組みにおいては、依然として「据え置き型のテレビ受像機」と「セダンタリーな身体」を中心に視聴空間が構成されているという事実である。続く第三節では、このような枠組みを更新するための概念的な道具立てを、視覚文化論やモバイル・メディア論といった隣接領域における概念化の取組を参照に検討してきた。この過程から浮かび上がったのが、「スクリーン」と「移動する身体」という枠組みにおいて、現在のテレビ視聴の分析を進めうる可能性である。

そこで最後に、本稿の意義と今後の課題について言及しておきたい。本稿の第一の意義は、「テレビ以後のテレビ研究」、もしくは「テレビ無きテレビ研究」の必要性を示唆した点にある。つまり、テレビ視聴自体は継続されながらも、そこに介在するテレビ受像機は減少していくなかで、いかにテレビ研究がテレビ研究足りうるのかという問いだ。恐らく、日本でも多くのメディア研究者がこの状況を認識しているにもかかわらず、依然として対応する動きが顕在化しているとは言いがたい。この据え置き型の映像機器から携帯型の映像機器へという視聴形態の移行は、同様の変容と向き合う英語圏では、かなり早い時期から分析の対象とされてきた。例えば第三節で指摘した、1990年代の映画研究における「フィルム／内容」から「スクリーン／形式」への関心の以降はその一例だと言えるだろう。加えて、アメリカのメディア史家リン・スピーゲル (Lynn Spigel) らの編集による『テレビ以降のテレビ：変容する媒体を巡るエッセイ』(Spigel and Olsson 2006) や、オーストラリアを代表する文化研究者、グレアム・ターナー (Graeme Turner) が編者の一人を務めた『テレビ以降のテレビ研究：ポスト放送時代のテレビを理解する』(Turner and Tay: 2009a) などは、スクリーンを軸とした断片的で、遍在するメディア消費の行く末をはっきりと射程に収めていたと言えるだろう<sup>16</sup>。後者でターナーらが指摘するように、本稿も「ポスト放送時代のテレビの形式、内容、機能—そして場所—を理解するための新しい方法を探求する」(Turner and Tay 2009b: 5) という目的を共有するものであった。

また、繰り返しになるが、本稿はこのようなテレビ視聴の現況を理解するために、「空間」という観点の重要性を指摘し、その空間を構成する要素が「テレビ受像機」と「セダンタリーな身体」という組み合わせから、「スクリーン」と「移動する身体」へと移行する可能性を示唆したものだ。その意味では、この「空間」という問題意識、加えて構成要因を検討する

重要性が共有されるうえでの前提となる学術的な文脈を明確に提示した点が、本稿の第二の意義だと考えている。実は、日本においても「メディア」と「空間」をキーワードとした研究成果は断片的に出版されてきた (e.g. 児島編 1999; 吉見ら 1999; 中野 2001)。ところが、これらの著作においては、メディア研究における「空間」概念がいかなる先行研究の延長線上に位置づけられるのかは必ずしも明瞭には描かれてこなかった。むしろ、この「空間」概念に、「メディアスケープ (mediascape)」(Appadurai 1996=2004) に代表されるような、急速な情報技術の革新と社会的浸透を背景に成立したグローバルに情報が流通する空間が読み込まれることもあった。けれども、第二節で詳らかにしたように、基本的にメディア研究における「空間」概念の有効性は、テレビ視聴者が番組を解読する過程に限定して適用すべきであり、この文脈が共有されてこそ、「メディア空間」の成立をマスメディアの受信機器の据え置き機器化が進む 1960 年代に見ていた、中野の議論の独自性も明らかになるはずである (中野 2001: 第 II 部第 3 章)。

一方で、本稿の抱える課題はあまりにも多い。そこで、残された紙幅のなかで、今後の議論に資すると思われる二点を紹介する。一点目は、実証研究への適用可能性である。本稿は、近年増加した携帯型の端末による映像の視聴経験を議論するための方法論的なモデルの提案を優先したため、結果としてここで提案した「スクリーン」や「移動する身体」のニュアンスを歪めた点是否めない。例えば、今後の議論のなかでは、「スクリーン」という用語は、既存のテレビ受像機や映画のスクリーン、さらには都市空間の表面を覆うデジタル・サイネージを含めた概念として検討されることが望ましいが、本稿ではその主旨から、スマートフォンに代表される携帯型の映像端末に限定して使用せざるを得なかった。また、視聴経験の断片化についても、移動する視聴者は、そもそも 1 時間の連続ドラマや 2 時間の映画という単位ではなく、その視聴形態に応じて Youtube やニコニコ動画等の動画配信サイトを利用した短編映像にその視聴対象をシフトさせた可能性が存在するが、本稿のなかではこのような想像力にも言及できなかった。とはいえ、1990 年代のイギリスのメディア研究がそうであったように、変容する視聴形態を理解するためにまず求められるのはモデルである。まず現状を総体的に理解するための枠組みが共有されることで、より実情に即したかたちで、その枠組みが鍛えられていくからである。

もう一点は、本稿のテーマである「メディアと空間」というテーマが持つ包括的な位置づけを議論できなかった点だ。基本的に現在の日本のメディア研究に限れば、まず英語圏で「空間」への注目が集まった経緯が共有される必要があるだろう<sup>17)</sup>。しかし一方で、「空間」という観点からメディアを描くことは、メディア研究史そのものの再考にも繋がるとも考えている。その最たるものが、トロント学派だ。私たちは、ついマクルーハン (Marshall McLuhan) のキャッチーな言い回しに引かれ、そのステレオタイプ化された理解をもって良しとしてしまう傾向があるが、もしメディア研究におけるトロント学派という先入観を解

除できるとすれば、彼らが共有していたのは「テクノロジーの革新と時空感覚の変容」という問題意識である。マクルーハンに限って言えば、むしろ後半生の中心的な主題は「空間」ですらあった (e. g. McLuhan and McLuhan 1988=2002:第一章)。カナダのメディア研究者、文学者のリチャード・キャベル (Richard Cavell) も、「空間は、マクルーハンのきわめて多岐にわたる著作群のなかで、ただ一つ最も一貫した概念的なカテゴリー」(Cavell 2002: 中表紙) だと指摘する。トロント学派に留まらず、空間という観点からこれまでの研究を再検討することで、メディア産業史やメディア技術史とは異なるメディア史が描かれるし、それはすなわち、メディア研究における方法とは何だったのかを問い直すことにつながるはずだ。

最後に、本稿では従来日本のメディア研究では積極的な議論の対象となることの少なかった「空間」をテーマしてとりあげたため、方法論的な研究としては粗さが残った点については、ひとえに著者の力不足である。一方で、映像の視聴形態とその規定要因としての「空間」という問いは、メディア研究に限らず、映像を研究対象とする全ての隣接諸領域が抱える課題であり、研究の枠を越えた議論が生まれる一助となれば、本稿にとって望外の幸せである。

## 謝 辞

本稿は、2013年度東京経済大学個人研究助成費（研究課題番号：13 - 29）による研究成果の一部である。また、本稿の構想段階では、早稲田大学教育・総合科学学術院の伊藤守氏、立命館大学産業社会学部の飯田豊氏、東京藝術大学社会連携センターの大久保遼氏、東京大学大学院学際情報学府の近藤和都氏との議論が大いに参考となった、合わせて感謝したい。

## 注

- 1) 以降、英語文献は拙訳。
- 2) 以降、略称として「W杯」を用いる。
- 3) その様子は、大会期間中、マスメディアを通して頻繁に取り上げられていた。例えば、「青息吐息 通勤途中みんなで応援・携帯端末で観戦 サッカー W杯ギリシャ戦」(朝日新聞大阪版 2014年6月20日夕刊), 「サッカー W杯 ニッポンため息の朝 スマホ握り バス停、駅で観戦」(読売新聞中部版 2014年6月21日朝刊) など。
- 4) 「メディア・コンバージェンス」は、アメリカのメディア研究者ヘンリー・ジェンキンス (Henry Jenkins) が紹介して以降注目を集める概念だが、一方で自身は、「[このメディア=引用者] コンバージェンスが、主として同じデバイスのなかに複数のメディアの機能をまとめる技術的なプロセスとして理解されること」(Jenkins 2006: 2) に対しては、はっきりと否定的態度を示している。
- 5) 当時の北米のマス・コミュニケーション研究におけるコミュニケーションモデルを考えるうえでは、情報工学に加え、その理論的背景となっていた心理学、とりわけ行動主義の影響を無視することはできない。20世紀半ばにかけて、行動主義は心理学の一潮流という位置づけに留

- まらず、むしろ当時の社会科学に広範に影響を与えた理論モデルとして理解すべきだろう。マス・コミュニケーション研究への影響については、(Dennis & Wartella 1996=2005) に詳しい。
- 6) この過程で、ホールが「コミュニケーションの連鎖の両端において記号論的なパラダイムを利用することで、長年に渡ってマスメディア研究 (mass-media research) を悩ませてきた根強い行動主義を一掃することを約束する」(Hall 1980: 131) と述べ、行動主義に依拠したマス・コミュニケーション研究を強く批判していたことも付け加えておく。
  - 7) 「エンコーディング／デコーディング」理論は、日本語で詳細に説明された例は少ないが、(小笠原 2009)、(吉見 2000b) などは理解の手助けになる。
  - 8) ただし、ホールの「エンコーディング／デコーディング」は、手放しで視聴者の能動的な解釈を称揚したものではない。基本的にこのモデルは、「イギリス」で「ニュース番組」を見る視聴者を想定したものであり、「支配的」な読みに回収される、もしくは「交渉的」な立場に留まる視聴者が大半だということが前提とされていた。
  - 9) ホール以降のイギリスのメディア研究が異なる英語圏で受容される様子については、イギリスからの視点に限定されているが、(Morley 1992) の序章に詳しい。尚、同章は (吉見 2000a) に訳出されている。
  - 10) 以降、『ネーションワイド・オーディエンス』を『ネーションワイド』と略す。
  - 11) このような関心は、メディア人類学者とも呼べる、ダニエル・ミラー (Daniel Miller) の 1990 年代の著作にも共有されている。(Miller 1994) を参照のこと。
  - 12) この携帯型の情報端末を対象とした研究領域をどう総称するのは難しい。1980 年代からの、「ポケベル」「ケータイ」、そして現代の「スマートフォン」も含め、当座本稿では以降「モバイル・メディア研究」という用語を採用する。
  - 13) ここでの位置情報サービスとは、主として「Foursquare」に代表される位置情報に依拠した娯楽性の高い SNS のことを指している。従来の「mixi」や「facebook」とは異なり、サービス開始当初から、移動中の利用が前提とされていた。
  - 14) ウェブサイトは以下。Screen Studies Group, University of London, <http://www.screenstudies.org.uk/>, 2014 年 10 月 31 日閲覧。
  - 15) 「移動する身体」という概念を考える時に、「mobile」という言葉で理解することに僕はいささかの躊躇いを感じている。なぜなら、この用語は「携帯可能な」というニュアンスが強いからだ。むしろ、「移動の社会学」を主導してきたジョン・アーリ (John Urry) が、現代社会を特徴づけるのは「移動する生活 (life on the move) の激化」(Elliott and Urry 2010: 28) だと指摘したように、ニュアンスとしては「on the move」、つまり「常に移動している」というニュアンスの方が相応しいだろう。
  - 16) 日本でも同様の問題意識を共有した著作が、2014 年に漸く出版されている。(伊藤・毛利 2014) を参照のこと。
  - 17) ただし、それは、日本のメディア研究に比してイギリスのそれが進んでいると考えているからではない。同じテレビ視聴の変容と向き合う以上、先行研究のうえに新たな議論を積み上げた方が経済的だからである。

#### 参 考 文 献

- Appadurai, A. (1996) *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*, University of Minnesota Press = (2004) 門田健一訳 『さまよえる近代—グローバル化の文化研究』平凡社

- Cavell, R. (2002) *McLuhan in Space: A Cultural Geography*, Toronto, Buffalo and London: University of Toronto Press
- Dayan, D. and Katz, E. (1992) *Media Events: The Live Broadcasting of History*, Harvard University Press = (1996) 浅見克彦訳 『メディア・イベント－歴史を作るメディア・セレモニー』 NTT 出版
- Dennis, E. and Wartella, E. (1996) *AMERICAN COMMUNICATION RESEARCH- The Remembered History*, Lawrence Erlbaum Associates = (2005) 伊藤康博ら訳 『アメリカ・コミュニケーション研究の源流』 春風社
- Elliott, A. and Urry, J. (2010) *MOBILE LIVES*, London and New York: Routledge
- Friedberg, A. (2006) *The Virtual Window: From Alberti to Microsoft*, Cambridge and London: The MIT Press
- Hall, S. (1980) 'Encoding/ decoding', in Hall, S. et. al. (eds.) *Culture, Media, Language*, London: Unwin Hyman, pp.128-138.
- 伊藤守・毛利嘉孝編 (2014) 『アフター・テレビジョン・スタディーズ』 せりか書房
- Jenkins, H. (2006) *CONVERGENCE CULTURE: WHERE OLD AND NEW MEDIA COLLIDE*, New York and London: New York University Press
- 児島和人編 (1999) 『個人と社会のインターフェイス－メディア空間の生成と変容』 新曜社
- Leal, O. F. (1990) 'Popular taste and erudite repertoire: The place and space of television in Brazil', *Cultural Studies* Vol.4 (1), pp.19-29.
- McLuhan, M. and McLuhan, E. (1988) *Laws of Media: The New Science*, McLuhan Associates Ltd., and Eric McLuhan = (2002) 中津豊訳 『メディアの法則』 NTT 出版
- McCarthy, A. (2000) 'The misuse value of the TV set: Reading media objects in transitional urban spaces', *International Journal of Cultural Studies* Vol.3 (3) pp.307-330.
- …… (2001) *AMBIENT TELEVISION: visual culture and public space*, Durham and London: Duke University Press
- Miller, D. (1994) 'The Young and the Restless in Trinidad: a case of the local and global in mass consumption', in Silverstone, R. and Hirsh, E. (eds.) *Consuming Technologies: Media and information in domestic spaces*, London and New York: Routledge, pp.163-182.
- 光岡寿郎 (2010) 「なぜミュージアムでメディア研究か？－ロジャー・シルバーストーンのミュージアム論とその射程」, 『マス・コミュニケーション研究』 第76号, 119 - 137 頁
- Morley, D. (1980) *The Nationwide Audience: Structure and Decoding*, reprinted in Morley, D. and Brunson, C. (1999) *The Nationwide Television Studies*, London and New York: Routledge
- …… (1986 reprinted in 1988) *Family Television: Cultural Power and Domestic Leisure*, London and New York: Comedia/Routledge.
- …… (1992) *TELEVISION, AUDIENCE & CULTURAL STUDIES*, London and New York: Routledge
- 中野収 (2001) 『メディア空間－コミュニケーション革命の構造』 勁草書房
- 小笠原博毅 (2009) 「エンコード／デコード」, 伊藤守編 『よくわかるメディア・スタディーズ』 ミネルヴァ書房, 190-191 頁
- Silverstone, R. (1994) *Television and everyday life*, London and New York: Routledge

- de Souza e Silva, A. and Frith, J. (2012) *Mobile Interfaces in Public Spaces: Locational Privacy, Control, and Urban Sociability*, New York and London: Routledge
- Spigel, L. and Olsson, J. eds. (2004) *TELEVISION AFTER TV: Essays on a medium in transition*, Durham and London: Duke University Press
- Turner, G. and Tay, J. eds. (2009a) *Television Studies After TV*, London and New York: Routledge
- Turner, G. and Tay (2009b) 'Introduction', in Turner, G. and Tay, J. (eds.) *Television Studies After TV*, London and New York: Routledge
- Verhoeff, N. (2012) *Mobile Screens: The Visual Regime of Navigation*, Amsterdam: Amsterdam University Press
- 吉見俊哉編 (2000a) 『メディア・スタディーズ』せりか書房
- 吉見俊哉 (2000b) 「メディア・スタディーズのために」, 吉見俊哉編『メディア・スタディーズ』せりか書房, 6-20 頁
- 吉見俊哉, 大澤真幸, 小森陽一, 田島淳子, 山中速人 (1999) 『メディア空間の変容と多文化社会』青弓社